
タンナー

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タンナー

【NNコード】

N4456Y

【作者名】

山田スウェル

【あらすじ】

タンナーはのカワに気持ちを染み込ませる事にした。

『クローム』と呼ばれる、生まれた時から殺意が染み着いている僕と『タンナー』呼ばれ、善意しか知らないヒロインとのストーリー。これは鞄に詰め込んだ世界の話。

定員オーバーのバスは世界がいかに退屈しているかを表していた。ついに、このままだと発車が出来ないとアナウンスが流れ、車内で唯一着席を許されたタンナーが僕らのチェックを始める。さっそく一人を摘むと、運転手にドアを開けるよう手を上げた。その間、僕らは沈黙を守った。文字通り、摘み出された彼も無言だった。

そしてバスはまた走り出す。置き去りにされた彼は砂煙にまみれ、もう見えない。

「さよなら、兄弟」

誰かが言つ。

「喋るな、酸素が薄くなる」

誰かが怒つた。

密着度が高い為、それぞれの息遣いも伝わってくる。みんな緊張を隠せない。当然だ。

僕は小柄という理由でステップ付近に立たされている。たぶん、次の駅で降ろされるだろう。サンカクと呼ばれる街は僕みたいなクロームが活動しやすいそうだ。

指紋だらけのガラスに映る僕は、人間における15、6歳の少年。こんな華奢な体が役立つとは思えない。幾ら数を出荷しなければならないと言つても、僕は早すぎる。

先ほど降ろされた彼みたいに有害物質が付着したまではないが、腕、特に右腕に足らなさを感じる。こんな違和感があるまま、引き金を引けるのだろうか。

「よお、坊主。どうした？ びびつてんのか？」

彼が僕を観察していたのは知っている。中央に立っていたのにわざわざ近くへやつて来て、見下ろしてきたのだ。

「どうした？ 声も出ない位にびびつてるのか？」

染めムラがひとつもない逞しい体を見せつけられる。静かにその時が来るのを待つ周囲は彼に苛立つも、言葉にはしない。タンナーだつて目を瞑るくらいだ。

「まあ、リラックスする事だ。そんな顔をしてちや、上手く行く事もいかなくなるぞ！」

「僕は笑えないんです。顔の筋肉までオイルが入らなかつたんで」

彼を見上げて答える。

「あなたの様に充分なめされたら違つたんでしょうけど」

すると男は髪を搔きながら、困った表情を浮かべた。そして感情を表現出来る事が嫉妬対象なのに、そして何より気付かない鈍感さが人間っぽい。

人間に似た、クロームの成功品には特別な任務が与えられると聞く。彼が紙面を賑わすのもそう遠くないと思う。

「降りる」

気付くとタンナーが僕を指している。動くのも面倒じりしへ、クローム等が身を捩つて指先が通れるようにならした。

「待てよ、俺も一緒にいく！」

「は？」

ドアが開くと先に降りて行った。彼の下車に焦ったタンナーは側のクロームへ追いつき指示する。

「ほりよ、荷物」

足でドアを閉め、ボストンバッグを投げる。少し車内に振り返つて、肩を竦めた。

「あーやだやだ、ステイックサイダーは」

「あなただって、そうじやないですか？」

思わず力が入り、合皮が軋む。バッグに詰め込んだのは一日分の着替えだけだ。文庫本を持ち出す事は許されなかつた。

「いや、俺はほんと遅い。お前等みたいに突っ立つたまま泡になるなんて『ゴメンだ』

彼の背後を叩く兄弟達。見れば長い足でドアを開かせないよう押さえてある。

「もう一度、僕らをステイックサイダーって呼んだら怒りますから」「はー、やるってか？」

首を横に振る。

「あなたに力で適つなんて思つてません
だよなあー」

「でも」

僕はポケットから漬れそうなペットボトルを出す。と、男の顔は
みるみると引き締まり、降参だつて手を上げた。
けれどその指先は一方で太陽を引っかこうとしている。

「あなたがクロームである限り、これが苦手なのは同じです」

「はいはい、分かったよ分かりましたとも。バスに帰りますってば
自由な左足で蹴つて、背中を向けられると、ジーンズに文庫本が
差し込んであった。

「ん?」

視線に気付く男。

「お前も好きか?」

素直に頷く僕。

「そつか、あの施設で娯楽つて言えば「これくらいしか無いもんな」

文庫本を抜き、ぱんぱんと表紙を叩く。かなり読み込まれたもの
でページは波打っている。

「ほれ、やるよ」

「え？」

「どうせ返して貰えないんだからさ」

つい受け取ってしまい、言葉に詰まる。男は構わずバスへ乗り込んでしまつ。

「あ、あの！」

「ん？」

「あ、ありがとう」

感謝は伝わったか曖昧だ。乗車するなり彼はタンナーの元に連れて行かれ、そのうちバスが動き出す。僕は今日からこの街で死ぬまで生きていくんだ。ボストンバッグと文庫本が決意に軋む。

砂埃が引いた先に広がる市街はそれなりの賑わいがあり、鐘の音が響き渡る。食料を抱えた女性等が行き交う道は昼食の香りが漂い、やたらパン屋の看板が目に付く。

資料によるとサンカクではサンドイッチが主食で、トマトやレタスなどの野菜を栽培する家庭も多いらしい。

行列が出来る店の前を通り掛かつた時だつた。何か懐かしい気持ちになり足を止める。少女は店先でみずみずしい野菜を挟んだサンデイッチを頬張つて、そんな僕を爪先から見上げた。

「あなた、クローム？」

「うくん、音をさせて飲み込む少女。壁へ寄りかかったスカートに汚れが無いか確認しつつ、こちらへ近付いてくる。そして列に並ぶ人達は少女を田で追つた。

「あなたは？」

「わたしはトウミ。一応、君の先輩になるのかなー」

「うて、トウミと名乗った少女はペースをする。

「あれ、知らないの？ これ。サワガニペースだよ、サワガニペース。チヨキチヨキつてさー！」

ハサミの仕草をしても僕の沈黙を切れないと分かると、トウミはサンドイッチをかじつた。

「君つて、つまんないやー！」

強く歯んだ拍子にトマトの汁が飛び出す。

「あーあ、またやつちやつた」

胸元を摘んで、染みを嘆くトウミ。

「吉田君つて、うるさいんだよねー」

ちゅうちゅう、音を立ててブラウスに吸い付き始める。しかし染みは薄くなる所か、口に残っているソースによつて大きくなつてしまつ。挙げ句、中途半端にかじつたサンドイッチがバランスを崩し、中身だけ滑り落ちていつた。

「あ……」

トウミは僕とサンディッシュを交互に見る。

「落ちましたね」

「うん」

「勿体ない、ですね」

「うん」

サンディッシュを拾つでもなく、僕等は向き合つたまま。

「同じクロームなのに、ちつとも似てないのねー」

「それはあなたが成功品で、僕が粗悪品だからです」

トウミが大袈裟に肩を落とすと、髪と肩の隙間から男性が走つてくるのが見えた。男性はトウミをお嬢様と呼ぶ。

8

「あら、吉田君」

何度もかにやつと返事をするトウミ。

「あら、じゃないですよー。一体何処に行つてらしたんですか？」

「んー、サンディッシュ屋？」

僕に訊ねてくる。

「わちわちはー。」

白い手袋が僕を差す。

「お嬢様、仕事を増やす真似はなさらないで下すこと何度も申し上げ

た、う……

その白い手袋を覆つ小麦色したトコリの猫。

「はー、はー。何度も伺いましたって。じゃあ、帰りましょー」

不満を口にしながらも踵を返す、までは良かつた。トコリのわら
片方がいつの間にか僕を掴んでいた。

この頃の僕には想像出来なかつたんだ。トコリに捕まれたのが腕だけじやなつて。

僕等を乗せた馬車は郊外へ向かう。手綱を握る吉田はあれつきり黙つたままで、トウミも流れる景色を眺めている。

日除けがあるだけの簡素な馬車はよく揺れた。振動は空腹を刺激し、何處までも続きそうな沈黙がボストンバッグを抱えさせる。腹が鳴つても感付かれないのでした。

街に着くなりクロームと出会い、行動と共に出来るのは幸運と言える。それもトウミはフルクロームだ。フルクロームは兄弟の中でも別格でこつした生活を許されている。吉田のような世話役を与えられたり、人と積極的な接触が持てるのだ。

先程からこちらに向かつて手を振る人が居る。また馬車が停まつた際にトウミはサインを求められもした。幾ら人と似通つていようと所詮僕等は偽物。タンナーによつて人の要素を染み込まれただけなのに。トウミを美しいなどと騒ぐ人等がおかしかった。もし顔の神経が生きていれば、僕は笑つたのだろうか。

いや違う。トウミは黙つっていても、それが表情なんだ。

「君、何考へてるの？」

ふいと口を開くトウミ。目が合つて付け加えた。

「何考へてるの？ それとも何も考へてないの？」

その答えはどちらも、だ。考へなきゃ空腹を紛らわせられないし、

考えなくてもやらなあやこけない事など染み着いている。

「わっぱり分からない、君の感情が。ねえ、吉田君」
すると吉田は振り返らず頷いた。馬を操る背中は至みなく伸ばされ、そこへ実直な性格が表れている。

彼もクロームか確かめたくて乗り出しが察知され、睨まれてしまふ。吉田の肌は喜怒哀楽を乗せる必要がないのか、とても滑らか。まるで全ての感情を流せる様だ。

「とにかく部屋に着いたら、君に名前を付けてあげる

「名前？」

「そう、新しい名前よ。」

そう張り切る側に高い建物が見えてきた。馬車は入り口を指すと加速し、足場が土から舗装されたものに代わる。

「ここが君の部屋？」

「まあそんな所、かな？ 一応は事務所なんだけど

「事務所？」

急に馬車が停まった。

「説明は後からするよ、とりあえず降りて

備え付けてある踏み台を使わずトツミは先に降りた。で、僕に手を差し伸べる。

「一人で降りられるから」

「わう？ ならいいけど」

微笑むトウミ。吉田が隣にやって来て、馬車を預けてくる顔を云えた。戸惑う僕を一瞬だけ呆れた顔で見た気がする。

「バッグを

「え？」

「お預かりします」

有無を言わさず荷物を取り上げた時には、ポーカーフェイスに戻つていた。

「じゃ、行きましょ

トウミが吉田と馬をその場に残し、ノブを回す。

「ねえ、入るの？ 入らないの？」

僕は周囲を一周見回してから、一步を踏み出した。辺りに人気はない。事務所と呼ばれる建物は静けさと烟に囲まれ、ドアの向こうの賑やかさを疑ってしまう。

「大丈夫よ、取って食べやしないから」

痺れを切らし、入室するトウミ。数秒後には彼女を歓迎する声が上がった。

トウミを通したドアがゆっくり閉まっていく。隙間から漏れている明かりや声が遠くなり、僕は深く深呼吸するとそのドアへ手を掛けた。

声のボリュームからすると、室内に居る数は少ない様に思える。トウミと男女ひとりずつが腰掛け、くつろいでいた。

「おお、お前が新入りか！」

大声を浴びせられた僕はドアに埋もれてしまいそう。そして後退りも適わない姿を女性に笑われる。

「大丈夫よ、取って食べやしないから」

「それ、わたしも言つたし。それよりさ！　わたし言つたよね？　物を食べる仕事は嫌だつて」

テーブルを叩き、弾み付けて立ち上がるトウミ。と、すかさず男性がカップを寄せる。室内は椅子が四脚とテーブル、あと『925』と書かれた銀の表札が落ちているだけ。シンプルと言つより殺風景だ。

「まあまあ、そんな事言わないで？　あなたからも言つてくれないかな？」

急に女性が話を振つてくる。

「ほら、うちの事務所ってこんな有様じゃない？　仕事を選んでる場合じゃないのよ」

「そうそう、借金のかたにアン口ちゃんだつて持つていかれたんだからよ」

男性の口添えにトウミの表情が強張った。

「え、嘘？ アンコを渡したの？」

「だつて他に金田の物なんか無いだろ？」

開き直り、両手を上げる男性。一方、女性は僕に近付いて來た。

「あなた名前は？」

「え？」

「だから名前よ……って、トウミったらこんな粗悪品を拾つてきたの？」

トウミへ振り向く際、長い髪が僕の頬を打つ。髪からは仄かにオイルの香りがした。この女性、クロームだ。それに男性もそう違う。彼には僕と同じトラが見受けられる。

通常だとトラや血筋などの皺は加工で目立たないよう処理されはず。それを怠つているクロームの程度は決して高いものじゃない。視線に気付いた男性はそれでも顔を歪めた。

「！」の傷か？

僕は俯く。

「お前にあるんだな、トラ」

頷く僕。僕には頃から背中に向け、一直線の傷が走つている。

「ちょっとー 男共！ そんな傷の舐め合いなんてどうでもいいのよー！」

トウミが間へ割つて入つてきた。

「一体、アンコをどうしてくれるのよ。」

「あなたこそ、こんな粗悪品を拾つてどうしてくれるのー。」

女性も負けずに食い下がる。

「あのね、いい？ うちはね、アンコ一匹だつて養える状況に無いのよー。」

言しながらトウミの正面へ立ち、手を腰に当たた。そして向き合つと二人の背格好が似か寄つてゐるのが分かる。これもクロームの特徴だ。彼女達は同じ一房でなめされたんだね。

「お嬢様方、お止め下さい」

と、背後が開く。

「外まで声が漏れていましたよ」

吉田は不思議な生物を抱いている。

「アンコー。」

「外をうろついておりました。この街だと猫は珍しい生き物ですか
ら、警戒されて拾われなかつたんでしょう」

「失礼ね！ アンコは病氣なんて持つていないんだからー。」

白い塊を奪つようとして、抱き締めたトウミ。いやーお、苦し気な鳴き声に女性が舌打ちする。

「吉田君、せつかく捨てたのに拾つて来ないでよ」
「あー、せっぱり捨てたんじやない！ 借金のかたとか言ってたく

せに！」「

「いーや、確かにくれてやつたんだって。そいつが捨てたんだろう？」

「

トウミの頭をひとつ撫で、男は席に戻る。

「知ってるだろ？ ここん所、体に爪痕を残した死体がじろじろ見つかるって話」

「あー、そんなニュースあつたね」

「何よ、その人事みたいな言い方は！」

「だつて人事じゃん。どうせ、タンナーの差し金じゃないの？ ねー？アン！」

僕は誰の言葉について行つていいか迷い、最後は天井を仰いだ。裸の蛍光灯が一本あり、ひとつは今にも消えそう。ちかちか点滅している。

「あぢやー、おい林五！」

「言つとくけど、買えないからね」

「あーやだやだ、貧乏って心まで荒ませるのよ、ねー？ アン！」

どうやら林五と書いてリンゴと読むらしい。クリーム色を汚す悪口はトウミが書いたのだろうか。けれど、この高さをひとつクリアしたんだろう。

「もしかして、あなた飛べないの？」

四人が同時に僕を見る。前後左右から刺さる視線は生温さを帯び、

やつへり縛り上げられたるよつたな気分だ。

「二や一九」

暫く沈黙が続いたが、こんな僕を救おうと門を立ててく
れ、吉田が口を開く。

「とにかく話をしましょへ、みなむえ」

田二甲袋は一回、ぱんぱんと鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4456y/>

タンナー

2011年11月21日14時29分発行